

# 吉益東洞『古書医言』と『医事古言』

両書の比較、延いては『古書医言』の文献学的特質について

舘野正美

〔要旨〕吉益為則東洞、江戸時代古医方最大の医家の一人である。彼の医学的実践については、医学的観点から多くの研究が行なわれて来ている。ところが、彼の医学思想、特にその一大著作『古書医言』については、それこそ正に彼の医学思想の中核であるにも拘わらず、従来ほとんど研究されることがなかった。更に言えば、この『古書医言』にはいささか参照すべき資料があるにも拘わらず、この書物自体についての研究は、ほとんど見出だすことができないのである。そこでこの小論は、その未完全な前身である『医事古言』中の記載との照合を通じて、この書物の文献学的意義を明らかにしようとするものである。かくして、以下のような結論を下す可能性に至りうる。すなわち、東洞の『古書医言』執筆のひとつの中心的要因は、彼の万病一毒説の淵源としての『呂氏春秋』中の医学的記述を加え、そしてこれにより詳細な陳述を下すことにあったと言えるのである。

キーワード——吉益東洞、医事古言、古書医言、呂氏春秋

## はじめに

吉益東洞（元禄一五（一七〇二）年～安永二（一七七三）年）、名は為則。我が国江戸時代における、いわゆる「古医方」最大の医家である。①彼はその病理学的思惟の脈絡において、中国古代の内経医学以来の伝統であり、我が国においても曲直瀬道三に代表される「後世方派」の医家たちにも、きわめて一般的であった陰陽五行説を排し、一切の病因はおろか病名すらも全く語ろうとせず、「万病一毒説」の旗標のもとに峻剂による汗吐下和四法の徹底を主張し、更に独自の「天命説」を唱えて、時にいささか過激とさえ評される一大臨床家（実践家）であった。②

ところで、この吉益東洞の医学思想を考究するに当って、まず問題となるのが、その中心的な資料であろう。この点についての詳論は別稿に譲るとして、あらゆる角度から見ても、その中心的資料となりうべき東洞の一大著作が、彼の『古書医言』であったと考えられる。すなわち、『古書医言』全四巻は、文化一一（一八一四）年刊、東洞が折りに触れて書き溜めていたものを嗣子南涯・孫北州らが校定し、刊行したものであるが、現在の版本には、文化十（二八一三）年付の北州の序が付されている。中国の古典文献中に記されて残存する、中国古代の医学思想についての、東洞の考え方が、きわめて単刀直入に記述されており、いわゆる「万病一毒説」をはじめとする、東洞の医学思想を解明し、あわせてその特質を浮き彫りにするための、好箇の資料であると考えられる。つまり、この『古書医言』こそ、東洞が、かの『黄帝内経』や『傷寒論』はもとより、『周易』や『尚書』等の、いわゆる「経書」をはじめとして、『荀子』や『文子』等といった「諸子」の書物にまで及ぶ、総計三十七種類の中国の古典文献を広く涉猟し、それらの中に散見する中国古代の医学思想について、彼のその独自の観点から、これを分析して記述し、更に彼のその独自の病理学的思惟の観点から、中国の古典文献に見える医学思想の諸形態について分析し、これを記述するという、ひとり「古医方」の医学体系についての医史的な見地からの理論的な研究においてのみならず、その医学思想の淵源形態の追究、延いては、ひろく中

国古代の医学思想全体についての体系的な研究においてもまた、きわめて重要な位置を占めるところの一大著作であったと考えられるのである。

ところが、この『古書医言』という書物それ自体、更にその医学思想的な内容については、従来ほとんど研究されなかつた如くに見受けられる。すなわち、その調剤・薬功などについての書物——たとえば、『薬徴』や『類聚方』など——についての医薬学的分析を通じて、その医説を研究することに比して、東洞の医学思想を、主にこの『古書医言』を基本資料として考究することは、従来ほとんど行なわれて来なかつたように見受けられるのであり、従って、この点において、現在の東洞研究には、ほんのいささか補う点があるように思われるのである。

そこで本論致は、この『古書医言』を基本資料とする東洞の医学思想研究の一環として、『古書医言』の文献学的特質について、特にこれを、その書物としての前身とされる『医事古言』との比較を通じていささか明らかにしてゆくことを目的とするものである。以下、順を追って論究してみたい。

## 一

吉益辰羸齋（明和四（一七六七）年～文化二三（一八一六）年、東洞の第三子）の手になる東洞の著書目録には、『医事古言』について、あくまでも『古書医言』についての付加的記述として、次のように記されている。

古書医言四卷

先命医事古言者、後改之、

（古書医言四卷

先に医事古言と命なづくる者。後之を改む。）

この吉益辰羸齋のことを見ると、『医事古言』と『古書医言』とは、本来同一の書物であったものが、あたかも——

多少の加筆訂正はあるものの——その書名だけを変えて、あらたに出版されたような印象を与えがちではある。確かにこれら両書の内容に隔絶した相違が認められるということは決してなく、全く、あるいは内容的に、ほとんど同一の記述も数多く見受けられる。

とはいえ、これら両書を外見的に対比しただけでも、一目瞭然明らかな通り、『古書医言』は、『医事古言』の優に四倍近い分量があり、更に内容的にも、いささかの変化が認められることも確かであると思われる。そこで『古書医言』は、単なる『医事古言』の復刻版あるいは再(三)版本ではなく、大幅な増補改訂版であると考えた方がよいと思われる。すなわち、逆に言えば、『医事古言』は、『古書医言』の、いわば「未完成」の前身であり、一見して判然たる通り、『医事古言』において全く触れられていなかった『黄帝内経』や『傷寒論』等の「古書」における古典医学的記述の引用と、それらについての東洞の医学思想的な観点からのコメントを初めとして、更にその他の「古書」からの引用と一層詳細なるコメントを載せ、以て彼の医学思想を敷衍しようとするのが、他ならぬ『古書医言』であったと言いうことができると思われるのである。

要するに、『古書医言』における『黄帝内経』・『傷寒論』・『漢書』等についての記述は、『医事古言』には全く見られなかったものが、きわめて多量に、しかも詳細に記載されており、『医事古言』に手を加えて『古書医言』を執筆した東洞の意志が、きわめて明確に窺えると言つてよいであろうし、又、同じく『潜夫論』や『鶡冠子』等についての記述も、『古書医言』においてのみ見られるものであり、『黄帝内経』や『傷寒論』等についてのそれほどの分量も内容もないが、それなりに有意義なものであると考えられる。そして更に、『周礼』・『淮南子』・『論語』等の諸書については、もともと『医事古言』においても、かなり充実した内容の記述であったものが、『古書医言』に至っては、更に充実したものになつており、『古書医言』の完成度の高さを物語るものであると言えよう。

とはいえ同時に又、それら『周礼』・『淮南子』・『論語』等の諸書についての記述においても、更に詳細に両書を比較

してみたならば、『医事古言』↓『古書医言』という移り変わりの過程に、東洞の医学思想の特徴的な一面や、『古書医言』執筆の淵源などを窺わせる、きわめて興味深い部分もあり、更にその上、『史記』・『呂氏春秋』・『荀子』等の諸書についての記述に至っては、『医事古言』にも見られるが、『古書医言』のそれは、全くその比ではなく、分量・内容共にきわめて充実しており、就中『史記』と『呂氏春秋』の部分は、特に東洞の医学思想の観点から見てもきわめて重要な内容の記述を多く含んでおり、正にこれらのためにこの『古書医言』が執筆されたと言つても、ある意味では、決して過言ではないと思われるのである。

そこで今、東洞の『古書医言』執筆の淵源として余りにも自明な『黄帝内经』や『傷寒論』等の諸書の部分と、『医事古言』と『古書医言』の両書において、ほとんど書き換えが行なわれていない、あるいは又ほとんど取り挙げる必要がないと判断されるころの『楊子法言』・『申鑒』・『鬼谷子』・『亢倉子』・『劉子新論』等の諸書の部分<sup>4</sup>については、ひとまずこれを措き、まずは『史記』・『呂氏春秋』等の、あるいはこれらについての増補改訂が『古書医言』執筆の淵源かとさえ言うる諸書についての記述についてこれを概観し、更に先に指摘した『周礼』や『淮南子』等についての記述を垣間見て、その細部を窺い、最後にその他の諸書についての記述を取り上げ、いささか補足すべき点に論及し、全体をまとめるに至りたいと考えるところである。

## 一

『医事古言』から『古書医言』への推移の過程において、きわめて重要な増補改訂が行なわれていると考えられるのは『史記』と『呂氏春秋』についての記述の部分、そして、それほどではないが、やはりそれに次いで重要な部分が、『荀子』・『説苑』・『戦国策』・『韓非子』についての記述の部分であると見受けられる。以下、順に検討してみたい。

## ①『史記』

『史記』についての、『医事古言』に見える記述は、扁鵲について、『史記』の「扁鵲伝」から、東洞が非常に重視した、あの「病応見於大表、（病応、大表に見わる。）<sup>5</sup>」という一句を含む一文を引用し、それに続いて、「為則曰、是疾医語也、可謂万代不易医則矣、（為則曰く、是れ疾医の語なり。万代不易の医則なりと謂うべし。）で始まる、きわめて長文のコメント——『医事古言』中においては、異例のもの——を載せ、彼の医説を展開している。要するに、扁鵲のこの「病応、大表に見わる。」の治方こそまさに正統の「古医方」であり、扁鵲こそ詢に「疾医の龜鑑」である、と扁鵲の医術を高く位置づけ、その上で更に「夫万病唯一毒也」（夫れ万病は唯一毒なり。）と自説を敷衍する。東洞の基本的な医学思想を最も典型的に主張する記述であり、既に『医事古言』執筆当時から、この基本的な主張に変わりがなかったことを物語るものであると考えられる。

とはいえ、『古書医言』における『史記』についての記述を見ると、それは更に詳細を極め、全く『医事古言』のそれの比ではないことが一見して看取しうるのである。すなわち、『古書医言』においては『史記』、「扁鵲伝」の文章それ自体の引用は、むしろカットされているが、きわめて長文の「扁鵲伝評」・「説扁鵲之伝」・「扁鵲伝総論」、そして更に「大倉倉伝」の「医案」二十九条ひとつひとつに評をつけるという念の入った記述が載せられている。確かに東洞が主張する医説の内容それ自体、そして又その陳述の形態は、『医事古言』と『古書医言』の両書において、基本的に全く同一のものではあるが、その記載の分量と、それに伴う詳細さの点で、『医事古言』から『古書医言』への移行において大幅な加筆が行なわれたことは全く疑いない事実であり、『古書』中の記載を以てみずからの医説を根拠付け敷衍するという『古書医言』——言うまでもなく、その前身としての『医事古言』——の目的は、『古書医言』に至って、更に大いに達成されたと言つてよからうかと思われ、従つて、この点において又、『古書医言』執筆の大きな目的が認められるものと思われるのである。

このことは、更に次の『呂氏春秋』の箇所において、より典型的に看取されう。

## ② 『呂氏春秋』

『呂氏春秋』中に見える医学的記述についての東洞の考え方については、既に他稿においていささかこれを分析したゆえ、ここではその詳細な内容の検討は割愛する。要するに、『医事古言』に見える『呂氏春秋』からの引用文八条のうち、今ここで最も問題になるであろう「尽数篇」と「達鬱篇」の一文と、補足的に説明が必要とされるであろう「十二月紀」についての一文を除いた残り五条については、大率『医事古言』から『古書医言』への改訂において、引用文（の引用箇所）が再検討されて簡潔または詳細になり、そのコメントも、更に推敲され当を得た明確な記述になっていると考えてよさそうである。

そこで今、最も重要な「尽数篇」の一文について検討してみたい。すなわち、『医事古言』において東洞は、この『呂氏春秋』、「尽数篇」の一文、というよりも、むしろ、文中に「……云云……」と一部分の省略を挟むもののほぼ一篇全体に亘ってこれを引用している。『呂氏春秋』、「尽数篇」の記載の、東洞にとつての重要性を認識していたのではあろう。しかし、それだけ長く、しかも重要な一文を引用していながら、如何なることか、東洞のコメントは、

為則曰、以水軽重甘辛苦立論也、未知其所拠也、俟後君子、（為則曰く、水の軽重甘辛苦を以て論を立つ。未だ其の拠る所を知らず。後の君子を俟つ。）

と、たったひとこと、それも殆んど内容的に的外れな記載があるに止まっている。東洞のこのコメントは、彼が引用している『呂氏春秋』、「尽数篇」の本文中に、

軽水所多禿与瘦人、重水所多燠与躰人、……（軽水の所には禿と飄人と多く、重水の所には燠と躰人と多く、……『呂氏春秋』、「尽数篇」）

とあるのを受けているものではあるが、むしろ重要なのは、その前後の「鬱（毒）」についての記載や「精氣」について

のそれであり、果たして次に触れる通り、『古書医言』において、東洞は、わざわざこの一篇全体を三段に分けて、これを引用し、そのそれぞれについて、詳細に、しかも明確にコメントしているのである。してみると、あるいは東洞は、未だこの『医事古言』執筆中には、『呂氏春秋』、「尽数篇」のこの一文の彼の医学思想にとつての重大さに気付いていなかったのか、とさえ思われるのである。

そこで思い起こされるのが、東洞の次のような発言である。

夫万病一毒という事、医断に著したるは既二十年ばかり以前の事なり。然るに万病の唯一毒なる事を自得したるは、漸此八九年このかたなり。其もとは呂氏春秋に鬱毒の論あり。(『医事或問』、巻下)

引用文中の『医断』は、東洞の門人である鶴田元逸が延享四(一七四七)年に編集し、まとめたものを、宝曆九(一七五九)年に中西惟忠が刊行したものである。従つて、『医事或問』(巻下)の右の文章を東洞が書いたのは、ほぼ一七六五年前後すなわち、東洞逸年のことであると推される。果たして『医事或問』が編集されたのは、明和六(一七六九)年のことである。そこで明らかかなことは、要するに、東洞は、その臨床経験を通じて、早くからいわゆる「万病一毒説」の考えを持つに至つてはいたが、それを明瞭に意識し、彼自身の病理学的思维の体系においてひとつの医学思想として明確に確立できたのは、ようやくその晩年に至つてのことであつた、ということである。

かくして今一度、『古書医言』における、この『呂氏春秋』、「尽数篇」の箇所を見るならば、ここにおいて東洞は、まずこの「尽数篇」の全文を三段に分けて、しかも全く省略することなく全て引用し、その三段それぞれに対して「為則曰く……」と、彼のコメントを付しているが、特に重要な第二段目と第三段目においては、

……命之曰鬱毒、是即病也、故疾医為万病唯一毒、而去其毒、其毒以汗吐下而解去、則諸病疾苦尽治焉、……(……)之を命けて鬱毒ウツドクと曰う。是れ即ち病なり。故に疾医は万病唯一毒と為して、其の毒を去る。其の毒、汗吐下を以て解去さるれば、則ち諸病疾苦尽く治す。……第二段のコメント)



……吾於是益知万病唯一毒、退見扁鵲伝、扁鵲亦然、……(……吾、是に於いて益々万病唯一毒なるを知る。退きて扁鵲伝を見るに、扁鵲も亦然り。……第三段のコメント)

と、再三に亘つて、彼の最重要の医説を繰り返し明確に、しかも詳細に記述している。これはやはり、『呂氏春秋』、「尽数篇」のこれらの諸句が、彼の医説の淵源をなすものとして、東洞にとつてきわめて重要なものと見做されていた事実を十分に物語るものであると考えられるのである。

果たして、この『呂氏春秋』の項の末尾には、『呂氏春秋』全体についての東洞のコメントが記載されている——これも又、この『古書医言』において異例のことであるが、山崎本では、更に一段高く行を上げて記述されている。その一文は次の通りである。

為則曰、余継父祖之業、既欲行之、無規矩準繩、以臆伝之、固不可為、於是乎広尋医之可以為規矩準繩者矣、……唯忙忙然如望大洋、無奈之何、已而奮発曰、書不言乎、学于古訓有獲、於是乎涉獵漢以上之書、至呂氏春秋尽数達鬱二篇、拍節仰天而嘆曰、嗟聖人之言、信而有徵、是治病之大本、良又万病唯一毒之枢機也、……(為則曰く、余、父祖の業を継ぎ、既に之を行なわんと欲するに、規矩準繩なく、臆を以て之を伝うれば、固に為すべからず。是に於いてか医の以て規矩準繩と為すべき者を尋ねたり。……唯忙忙然として大洋を望むが如し。之を奈何ともするなし。已にして奮発して曰く、書に言わざらんや、古訓に学べば獲ることあらんと。是に於てか漢以上の書を涉獵して、呂氏春秋、尽数・達鬱の二篇に至る。節を拍ち天を仰ぎて嘆じて曰く、嗟聖人の言、信にして徵あり。是れ病を治するの大本にして、良に又万病唯一毒の枢機なり、と。……)

ここで〈尽数・達鬱の二篇〉と言われる〈達鬱〉とは、やはりこの『呂氏春秋』の一篇で、〈精气〉の「鬱滞」が諸病の原因であることを説く一篇であり、その原文が『医事古言』・『古書医言』双方に引用され、『医事古言』においては、為則曰、精者、調養一身四肢百骸之精液也、通暢則為養、停滯則為毒、是乃病也、……(為則曰く、精とは、一身四

肢百骸を調養するの精液なり。通暢すれば則ち養を為し、停滞すれば則ち毒を為す。是れ乃ち病なり。……と、『呂氏春秋』、『達鬱篇』本文の〈精气〉を〈精液〉と読み換えた上で、その〈停滞〉が〈毒を為す〉と説く、いささか推敲を要するであろうコメントが添えられており、又『古書医言』においては、他篇の三つの引用文もまとめて引用され、今ここに引いた、一種の「まとめ」の一文が記述されているのである。

そこで今、先に引いた『医事或問』の一文をも考えあわせて全体を要するに、『医事古言』執筆当時の東洞は、たしかにその〈万病一毒説〉の考えを自覚してはいたが、みずからの病理学的思惟の脈絡の中において、ひとつの医学思想として明確に確立するには至っていなかったのが、その後、彼のいわゆる〈医道〉（『復宗梅諄書』）の精進を続け、かつ中国の古典を広く渉獵して、その文献的・理論的裏付けを得て、晩年に至り、ようやくこれを確乎としてまとめ上げることを得て、『古書医言』執筆の際に、わざわざ異例の様式を取って、これを記述したのであると考えられるのである。従って『古書医言』のこの『呂氏春秋』の箇所は、ある意味で、この一書の医学思想の中枢をなすものであり、東洞の『古書医言』執筆の——唯一とは言わないまでも——最大の要因のひとつであると言いうるものと思われるのである。

かくしてこの『呂氏春秋』一書は、東洞にとつて、『黄帝内经』や『傷寒論』とは違った意味で——ある意味ではそれ以上に——重要な書物であったと考えられるのである。

尚、『十二月紀』の記述について、ひとこと補足する必要がある。『医事古言』においては、この「十二月紀」から一則のみ引用され、〈天令〉という語彙を要訣として、いわゆる『達鬱説』についての東洞の……是れを以て病を論ずるべからず。』という批判の一文が載せられているが、『古書医言』においては、全く触れられていない。しかしこれは、『古書医言』においては、『礼記』、『月令篇』の項においてまとめて論究されているためであり、編集・校定の跡が窺えるところである。

## ③『荀子』・『説苑』・『戦国策』・『韓非子』

以上に概観した『史記』や『呂氏春秋』二書についての記述に比べれば、その重要性において遠く及ばないところではあるが、大幅な増補が行なわれているのが『荀子』・『説苑』等の四書についての記述である。先ず『荀子』から見てゆくこととする。

『医事古言』において『荀子』からの引用は、たった一則のみで、しかも東洞のコメントすらない。それが『古書医言』では、十六則の多きを数え、特にいわゆる〈天人の分〉を主張する、『荀子』、「天論篇」の一文については、東洞も、……蓋荀子天論一篇、熟読玩味、而疾医之道、可闡明也、(……蓋し荀子の天論一篇は、熟読玩味して、疾医の道、闡明にすべきなり。)

と絶賛している。『古書医言』執筆のための重要な一書であったと考えられる。

次に『説苑』について。『医事古言』においては、たった一則のみが引かれ、コメントもなかったものが、『古書医言』においては、十四則が引かれ、それなりに重要なコメントも付けられている。必ずしも重大な書き加えであるとは断言できないまでも、ひとつの大きな増補であると言えるであろう。

又、つぎに『戦国策』について。『医事古言』においては、たった一則のみが引かれ、コメントもなかったものが、『古書医言』においては、七則が引かれ、それなりに重要なコメントも付けられている。やはりひとつの有意義な増補であると考えられる。

最後に『韓非子』について。『医事古言』においては、たった一則のみが引用され、コメントもなかったものが、『古書医言』においては、二十三則もの引用が連ねられ、それなりに意義のあるコメントも付けられている。これ又ひとつの重要な増補であると言えるであろう。

以上、『医事古言』から『古書医言』への推移の過程において、きわめて重大な増補改訂が行なわれている、あるいは

それに準ずる諸書についての記述の部分を概観した。これらの記載が、『古書医言』執筆の、大きな要因を物語るものであること、既に多言を要しないところであろう。

### 三

続いて、それほど大きな増補改訂はないものの、それなりに重要な書き換え・書き加えが行なわれている諸書についての記載の部分を概観してみたい。以下、一書ずつ順を追って検討してゆくこととする。

#### ① 『周礼』

『医事古言』における『周礼』からの引用文は、凡そ十則を数え、そのコメントもそれぞれ充実したものになってはいるが、それが更に『古書医言』においては、〈食医〉についての数ヶ条を、それぞれ分けて別々に数えたと十九則の多きに亘って引用し、そのコメントも更に推敲を経て明快なものになったものや、更に補足されたもの等があり、一層充実した記載内容となっている。

#### ② 『書経』

『書経』からの引用は、『医事古言』・『古書医言』ともにたった一条だけではあるが、東洞にとってきわめて重要な、若葉弗瞑眩、厥疾弗瘳、(若し葉瞑眩せざれば、厥の疾瘳えず。『書経』、「説命上篇」)

の一句であり、それについての『医事古言』のコメントも、簡潔で分かり易い一文であるが、〈正義に曰く……〉以下は、いささか不要であり、又『書経』本文のこの一文の重要性から見て、やはりいささか説明が足りないように見受けられるのが、『古書医言』においては、十分に詳しく明快なコメントに書き換えられている。わずか一条ではあるが、重要な書き加えであると言えるであろう。

## ③ 『淮南子』

『淮南子』からの引用は、既に『医事古言』においても十八則の多きを数え、そのコメントも、それなりに充実していると思われるが、やはりいまだ曖昧なものや不的確なものも見受けられる。そこで、『古書医言』においては、更にそれが四十七則の多きを数え、それぞれのコメントも時に詳しく、時に又、簡潔になり、一層の充実が計られている。

## ④ 『孔子家語』

もとより引用文・コメント共に、それなりに十分な記載であったものが、『古書医言』においては、引用文が補足され、又そのコメントもより充実したものに書き換えられ、又、不要な引用文は刪去され、より充実した内容の記載になっている。

## ⑤ 『論語』

『論語』からの引用文は、『医事古言』において四則見られ、そのコメントもそれなりに十分なものと考えられるが、やはり曖昧なものやいまだ不十分なものが目に付くのに対し、『古書医言』においては、引用文も更に九則に増え、そのコメントも非常に詳しく明確なものとなっている。全ての引用文に対して、非常に熱心な考究の跡が窺える。やはり重要な書き加えのひとつと考えてよいであろう。

## ⑥ 『春秋左氏伝』

『春秋左氏伝』からの引用は、『医事古言』においても、もともと十五則の多きを数える。やはり、大部の歴史書であるゆえに、医療記事も多く記載されているためであろう。しかし、その割にはそれらに対する東洞のコメントは少ない。『医事古言』においても、凡そ十五則の引用文の内、六つのそれには、東洞のコメントがない。取り敢えず引用文のみ記載したのである。『古書医言』においてもこの傾向は同じである。引用文の数は、同一の一項内にまとめて引用されている『管子』や『晏子春秋』のものも含めると五十九則に増え、それらに対する東洞のコメントも、推敲・考究の跡が

十分に窺えるが、やはり全体的に見て、先ずは『春秋左氏伝』中の医療記事を記載することに努めた感は免れないところであると思われる（東洞のコメントは、五十九則中二十則に過ぎない）。但し、『医事古言』においては一項を設けて記載していた『国語』の引用文・コメントや、今ここにまとめて引用されている『管子』や『晏子春秋』のそれらについても、『春秋左氏伝』に類似した記述がある場合、『古書医言』においては、それらをひとつにまとめて『春秋左氏伝』の項に記載し直し、

此文与左伝同、故不枚挙、（此の文左伝と同じ。故に枚挙せず。）

とか、あるいは更に

左伝之文、大同小異、故不枚挙、（左伝の文、大同小異。故に枚挙せず。）

等と再三に亘って繰り返し発言している。東洞の『春秋左氏伝』に対する考え方がよく表現されているが、それよりも寧ろ文献の改訂という点で注意されるべき事項であると言えるであろう。

### ⑦ 『列子』

『列子』からの引用は、『医事古言』・『古書医言』ともに十四条と、数の上では同一であるが、その内の約半数に当る六条が入れ換わっており、それらに対する東洞のコメントも、あるいは非常に詳しくなり、あるいは簡潔にまとめ直され、十分な改訂が行なわれていると言えるであろう。

### ⑧ 『関尹子』

『関尹子』からの引用文は、『医事古言』九条、『古書医言』六条と、むしろ減っている。但し、例えば「六七篇」の〈臧〉については、『古書医言』においては、『漢書』（五行志）の引用文のコメントにおいて詳論されているがゆえの『古書医言』での删去であり、又、「七釜篇」の〈栄衛〉については、むしろ『古書医言』の方において、より詳細に論じられている。<sup>27</sup>内容的に見れば、更に充実した改訂であると考えられる。

## ⑨ 『礼記』

『礼記』からの引用文も、『古書医言』においては、『医事古言』に比べて、大幅に刪去されている。「月令篇」の引用文をひとつにまとめて数えると、『医事古言』で二十三条あったものが、『古書医言』に至っては、わずか五条に減っている。但し『礼記』の記述は、本来いわゆる、〈礼〉の一環としての〈医〉事についてのそれであり、一見すると一種の医療記事とも取れる、あるいはそれに関する記述ではあるうが、東洞の関心事とは、いささか次元を異にするものであり、果たして『医事古言』においても、ほとんどコメントされていないのが実情である。このような実情に鑑みての整理(刪去)であり、その点で、まことに的確な改訂であると言えるであろう。

## ⑩ 『塩鉄論』

『塩鉄論』についての記述は、分量としては、『医事古言』・『古書医言』両書において、ほとんど変わらない。但し、『医事古言』において別々に引用していた引用文を、『古書医言』においてはひとつにまとめたり、あるいは、〈扁鵲〉についての四つのコメントのうち二つに推敲を加え、より明快な文章にし、更にもうひとつを刪去して、より簡潔な記載を指摘していることが窺える。前向きな改訂であると言えよう。

## ⑪ 『論衡』

『論衡』についての引用文は、『医事古言』・『古書医言』両書において数の上ではほとんど変わりが無い。しかし、内容的には、さして重要でないもの三条を刪去し、かわりに四条をあらたに補足し、更にそのコメントに至っては、大いに推敲を加え、かなりの書き加えが行なわれている。特に「量知篇」の〈子路使子羔為費宰……〉(子路、子羔をして費の宰たらしめんとす。……『論衡』、「量知篇」)の一文に対する『医事古言』から『古書医言』へのコメントの書き換えは、東洞の医学思想を窺う上で、ひとつの重要な資料となりうるものと思われる。

すなわち、『医事古言』において、東洞は、「量知篇」のこの一文に対して、

為則曰、陶弘景言、医者意也、其非也、以是可知矣、夫陶弘景学仙不知疾医之道也、然後世尊信此人過於扁張、所以古今異医道也、(為則曰く、陶弘景言わく、医は意なり、と。其の非なること、是れを以て知るべきなり。夫れ陶弘景は仙を学びて疾医の道を知らざるなり。然して後世此の人を尊信すること扁・張に過ぎたり。古今医道を異にする所以なり。)

と述べ、彼のいわゆる〈仙家医〉——理想的な〈疾医〉にはかなわぬまでも、最悪の〈陰陽医〉よりはまだまだましだとされる——の陶弘景を非難の対象として挙げている。

これに対して、『古書医言』において、東洞は、この同じ「量知篇」の一文に対して、

為則曰、後世許氏曰、医者意也、是本出于子華子、而其論之非、已可見於此、(為則曰く、後世許氏曰く、医は意なり、と。是れ本々子華子に出ず。而して其の論の非なること、已に此に見るべし。)

と述べている。ここで〈子華子に出ず〉と言うのは、『子華子』の「北宮意問篇」に、

医者理也、理者意也、薬者淪也、紆者養也、(医は理なり。理は意なり。薬は淪なり。淪は養なり。『子華子』、「北宮意問篇」)

とある一句を受けている。『子華子』や『論衡』の原文についての東洞の理解はいささか本筋を外れて〈意〉・〈理〉といった語彙に偏向しすぎているようにも思われるが、そのことは今暫く措くとして、このようないわば理論に走る医家たちのことを、東洞は〈陰陽医〉と呼んで激しく非難したのである。そこで、東洞のコメントにある〈後世許氏曰く、……〉の〈許氏〉とは、この『古書医言』(巻二)にも見える通り、南宋の許叔微のことであると考えられるが、この許叔微こそは、東洞のいわゆる〈陰陽医〉の流れを汲む典型的な人物なのであった。

してみると、ここで東洞は、『医事古言』の陶弘景から『古書医言』の許叔微へと、その非難の対象としてよりふさわしい人物へと書き換えを行なっているのである。おそらく、『医事古言』を執筆していた当時、東洞は、いまだ許叔微の(具体的に挙げられていないが、何らかの)発言を目にしていなかったであろう。とりあえず〈仙家医〉の陶弘景を挙げ



て、これを批判している。しかし、それでは臨床的な薬効を抽象的な〈意〉の次元において〈理〉論的に陳述するところの〈陰陽医〉をこそ非難の対象としたい東洞の本旨からはいささか外れることとなる。そこで後に許叔微のことは目をした東洞は、この『古書医言』を執筆するに当たってそのところを書き直したのである。

このことは又、この『子華子』、「北宮意問篇」の〈医は理なり。理は意なり。……〉という一文についての、それぞ

是非疾医之論也、然陶氏取之、因後世為医恒言、……(是れ疾医の論に非ざるなり。然るに陶氏之を取る。因りて後世、  
医の恒言と為れり。……『医事古言』)

是陰陽医之説、而非疾医之論也、……許叔微以降、擿之以為大害疾医之道、……(是れ陰陽医の説にして、疾医の論に  
非ざるなり。……許叔微以降、之に擿りて以て大いに疾医の道を害することを為す。……『古書医言』、卷二)

という『医事古言』と『古書医言』に見える東洞の両様のコメントに比してみても全く同様に看取しうるものと思われる。ここでも又、やはり〈仙家医〉の〈陶氏(弘景)〉(『医事古言』)は〈陰陽医〉の〈許叔微〉(『古書医言』)に、すなわち、より適切な人物に書き換えられているのである。『医事古言』から『古書医言』への重要な書き換えの一例であると思われる。

以上、それほど大きな増補改訂はないものの、それなりに重要な書き換え・書き加えが行なわれている諸書についての記載の部分について、これを概観した。更に続いて、『医事古言』には取り上げられていながら、『古書医言』では刪去されている諸書についての記載について、いささかこれを検討してみたい。

#### 四

『医事古言』においては取り上げられていながら、『古書医言』に至っては刪去されているのは、『国語』・『管子』・『周

『書』・『詩経』の「小雅」・『賈誼新書』・『墨子』・『白虎通』・『風俗通』・『司馬法』の諸書である。内容的に見ても東洞の医学思想の脈絡において、さして重要なものでなく、既に『医事古言』においてさえ、さしたるコメントも付されていない諸書についてはこれを措き、ここでは、いささか付加的な説明を要すると思われるものだけについて論及する。

### ① 『国語』

既に『春秋左氏伝』の項において触れた通り、『国語』からの引用は、『医事古言』の中では一項目として扱われているが、『古書医言』に至っては、不要なものはいくつも削除され、重要で残すべきは、『春秋左氏伝』中の同文（たとえば『国語』、『晋語』の「文子曰く、臣は国家に及ぶか……」↓『春秋左氏伝』、昭公元年・同、「晋語」の「鄭の簡公、公孫成子をして……」↓同、昭公七年等）として引用し、コメントを付している。その結果、『古書医言』においては、『国語』の一項目それ自体がなくなっているのである。

### ② 『管子』

『管子』は、むしろ前章において、取り上げるべき一書であり、たしかに、『古書医言』にも「管子に曰く、……」という箇所がある。もともと『医事古言』においても十分な記載があったものを、更に推敲を重ね、又不要な箇所を削去し、あるいは補足を行なって『古書医言』の記載となっている。但、書物全体として見ると、『管子』の書名は『古書医言』の目録にも挙げられておらず、その後の『晏子春秋』と同列に扱われ、最後に「左伝の文、大同小異。故に枚挙せず。」とまとめてコメントされているところを見ると、一応書物としての体裁上は、一項目として扱われていなかったと見てよさそうに思われる。

但し、この部分、山崎本では、『春秋左氏伝』もしくは『国語』のあとに「管子に曰く……」として二条が引かれ、それぞれ東洞のコメントが付けられている。（そのあとは断絶していて、続きの様子は分からない。）従って、あるいは南涯・北州の編集の問題もあるかも知れぬ点は、やはり留意しておかねばならないであろう。

## ③『賈誼新書』

『医事古言』には、四条引かれている。しかし東洞のコメントもなく、それほど重要な引用文であるとも見受けられない。今、『古書医言』には全く見当たらない。但、『漢書』の項に、『医事古言』において『賈誼新書』から引用したものと同一の一文を含む「賈誼伝」の文章を引いて、〈……俱に疾医の論に非ず。〉とコメントを付している。おそらく、これで十分と考えられたのであろう。

## 五

最後に、さして大きな問題はないにせよ、いささかの補足が必要と思われる諸書について触れておきたい。

## ①『易経』

『医事古言』における『易経』についての記述は全く不十分である。もとより、『易経』という書物の性格上、その中に医学的な記事を見出すことは、むしろ困難なことであり、それも致し方ないことのように思われる。但、『古書医言』に至っては、僅か一則ではあるが〈无妄〉の九五の爻辞と「象伝」が引かれ、詳細なコメントが付け加えられており、それにより、東洞が相当の易学の知識を持ち合わせていたことが窺われ、その点で又、有意義な加筆が行なわれたと言いうるであろう。

## ②『孔叢子』

『医事古言』においては二則の引用文があるのみで、コメントとてない。『古書医言』に至って、それら二つの引用文がひとつにまとめられ、更に詳細なコメントが付け加えられている。意義ある加筆校訂であると思われる。

## ③『莊子』

『医事古言』においては、僅か二則が引かれるのみで、コメントもほとんどないに等しい。『古書医言』に至っては、

引用文こそ二十二則の多きに亘っているが、ほとんどコメントが見られない点では全く同様である。最後にまとめて、  
 為則曰、老子列子莊子諸書、雖間謂病率尽譬喻、非疾医之義、(為則曰く、老子・列子・莊子の諸書、間々に病を謂うと雖も、率ね尽く譬喩なり。疾医の義に非ざるなり。)

とひとこと言われている。『文字』の項に、これ又ひとこと、

為則曰、道家之論、而疾医不取、(為則曰く、道家の論にして、疾医は取らざるなり。)  
 と言われるのと合わせて、東洞の考え方が窺われる項目であると思われる。

#### ④ 『文字』

『医事古言』においては長文の引用文一条と、へ……疾医の義に非ず……というコメントが付されている。『古書医言』に至っては、それが要領よく簡潔にまとめて引用され、又いまひとつの引用文とあわせて挙げられ、それぞれに短いコメント——要するにへ疾医は取らざるなり——が付されている。『莊子』の項においても触れた通り、東洞の道家思想に対する姿勢が窺えるコメントであると言えるであろう。

#### ⑤ 『子華子』

『医事古言』においては、二つあった引用文と、それぞれに対するコメントが、『古書医言』では、そのうちひとつが刪去され、あらたにもうひとつの引用とコメントが付け加えられている。但、やはり重要なものは、既に指摘したところの「北宮意問篇」の引用と、それに対する『医事古言』と『古書医言』それぞれのコメント(の推移)である。この点については既に触れた通りである。

#### ⑥ 『潜夫論』・『鶡冠子』

『医事古言』においては引用されていなかったものが、『古書医言』においては、それぞれ『潜夫論』(二則)・『鶡冠子』(二則)採られ、それなりに有意義なコメントが付されている。

## ⑦『漢書』・『後漢書』

これら両書も『古書医言』に至って初めて多量に引用されコメントされている。既にいささか触れた通り、内容的には多岐に亘り、様々な引用文・コメントが記載されており、重要な加筆であることは言うまでもないが、『古書医言』執筆の中心的課題であったとまでは言い切れないように見受けられる。

## 結 語

以上、『医事古言』との比較において、『古書医言』の文献学的特質について概観してみた。『医事古言』の全体は、限なく検討されて手を加えられ、引用文は必要に応じて詳しく引用され、あるいは場合によっては刪去され、更にそれらに対する東洞のコメントも、厳密な推敲が加えられ、あるいはより詳しく、あるいはより簡潔なものへと校訂されており、『古書医言』一書は、いささか不十分な出来栄であった『医事古言』を改訂して出版された、いわば決定版であったと言えるものであったと考えられるのである。

『古書医言』中において東洞が引用し、コメントを付けている多くの『古書』は、それぞれに様々な脈絡において重要な書物であることは言うまでもない。それら『古書』の一片一葉を東洞が限なく丹念に読み続けた結果が、最終的にこの『古書医言』一書においてまとめられているのである。但しここで、東洞の医学思想の観点から、この『古書医言』中で最重要の一書だけを、特に『医事古言』から『古書医言』への改訂の過程をも考えあわせて挙げるとなれば、それは『呂氏春秋』の一書ではなかったかと思われるのである。

たしかに『黄帝内経』は重要な医学書であり、『医事古言』を書き換える際の、きわめて重要な要訣をなす一書ではあろう。しかし、その書物自体の重要性は、必ずしも東洞の医学思想、更には『古書医言』中の重要性とは一致しないのではなからうか。『黄帝内経』は、東洞の考え方からすれば、あくまでも、

……率陰陽医之語、非疾医之語也、其中間有些一二古語在、……(……率ね陰陽医の語にして、疾医の語に非ざるなり。其の中、間々に些か一二の古語の在るあり。……『古書医言』、卷四、〈黄帝内経 十八卷〉についてのコメント)

という通り、その医学思想の根幹をなすところの原典であるとは見做されていなかったのである。又、『傷寒論』一書も、東洞にとつてきわめて重要な一書であることは言うまでもないところではある。しかし、それは寧ろ彼の臨床面での拠り所としての重要性であり、やはりその医学思想の面での淵源を記述する原典というものではなかったように思われる。『傷寒論』についての、東洞の次の発言は、このことを十分に物語るものであると言えよう。

……読於呂氏春秋、而雖有獲於病之大本為一毒、然未嘗獲其治法也、故孜孜汲汲、夜以繼日、久之始獲於傷寒論、不知手舞之足蹈之、是三代疾医、治万病一毒之法也、於是朝考夕試、視病之所在、以処其方、信而有徵、……於戲命哉、由天寵靈獲見此方、此方与呂氏春秋所言同為万病一毒、其視毒之所在、以処其方、何病患不治哉、……(……)

呂氏春秋を讀みて、病の大本を一毒と為すことを獲ることありと雖も、然るに未だ嘗て其の治法を獲ざるなり。故に孜孜汲汲として夜を以て日に繼ぎ、之を久しくして始めて傷寒論を獲たり。手に之を舞い足に之を蹈するを知らず。是れ三代の疾医、万病一毒の法を治むるなり。是に於て朝考夕試、病の所在を視て、以て其の方を処するに、信にして徵あり。……於戲命なるかな。天の寵靈に由りて此の方を見るを獲たり。此の方、呂氏春秋に言う所と同じく万病一毒と為す。其の毒の所在を視て、以て其の方を処す。何の病患か治せざらんや。……『古書医言』、卷四、〈傷寒論評〉)

そして、彼の調剤・薬功などについての臨床的な記録・見解は、むしろ『薬徴』や『類聚方』等に収められているのである。

更に『史記』の「扁鵲伝」や『周礼』等の諸書も、たしかに重要な書物であることは言うまでもない。しかし、それらも、東洞が、そのいわゆる〈疾医〉の鑑として尊崇する扁鵲の活躍ぶりを伝え、あるいはその〈疾医〉という語彙の典拠として、それぞれ重要視されている点で、やはり『呂氏春秋』の重要性には、一步譲るところがあるように思われ

るのである。そしてこのことは、他の諸書についても又、同様にあてはまることであると思われる。

そうであるとするならば、この『古書医言』中において、強いて最重要の書物を、特に東洞の医学思想の観点からひとつだけ挙げるとすると、それは『呂氏春秋』であり、その点で又、『医事古言』の改訂の最重要にして中心的なる課題を、ひとつだけ（一書だけに絞って）指摘するとするならば、この『呂氏春秋』の項に手を加えることになった、と言えると思われるのである。

### 注

(1) この点について、たとえば、中川壺山（一七七三〜一八五〇）は、当時の医方の流れを、新方と古方とに分類し、更にこの古方を擬古と真古とに分類して、この真古の筆頭に吉益東洞を挙げている（『医方新古弁』、巻上）。壺山は、たしかに南涯の門人ではあるが、現代の医史学者である矢数道明も、この説に添った見解を採っており（『近世漢方医学史——曲直瀬道三とその学統——』、九頁）、名著出版、東京、一九八二（昭和五十七年）、妥当な見解であると考えられる。この点についてはまた、富士川游『日本医学史』、二九四頁〜三四二頁〜三五二頁、形成社、東京、一九七二（昭和四十七年）・大塚敬節『漢方医学』、五八頁、創元社、東京、一九五六（昭和三十一年）等をも参看。

(2) この点については、富士川の注（一）前掲書（同前箇所）・大塚の注（一）前掲書（六三頁）・同『近世前期の医学』、広瀬・中山・大塚共編『近世科学思想 下』（日本思想大系63）五二〜五四二頁、岩波書店、東京、一九七一（昭和四十六年）・大塚恭男『中国医学の伝統』村上陽一郎編『医学思想と人間』（知の革命史6）六三〜九四頁、朝倉書店、東京、一九七九（昭和五十四年）、等を参看。

(3) この点については、拙稿「吉益東洞『古書医言』の文献学的考察——とくに自筆原稿との校合によって——」（『東洋文化研究所紀要』第一三六冊、一〜四七頁、一九九八（平成十年））を参看。

(4) 『医事古言』と『古書医言』の両書において、体裁・内容ともにほとんど変わっていない、あるいは、あってもほとんど問題にならない増補改訂であると判断されるのは、『元倉子』・『劉子新論』・『鄧圻子』・『心卵経』・『劉向新書』（以上、『古書医言』においてあらたに加わったもの）、『詩経』（大雅）・『陸賈新語』・『春秋繁露』・『韓詩外伝』・『楊子法言』・『申

「鑿」・「中論」・「老子」・「参同契」・「鬼谷子」(以上、ほとんど変わりのないもの)等の諸典籍についての記述部分である。(5) 以下、東洞の著作の引用は、原則として全て呉秀三・富士川游共編『東洞全集』、思文閣、京都、一九一八(大正七年)による。他の諸本によって時にいささか校勘することもあるが、あらためて注記しない。又、『医事古言』は、とりあえず文化二(一八〇五)年版を使う。但し、この刊本には甚だしい錯簡がある。今それを調整しなおした上で底本として使用する。文字そのものには問題はない。なお又、引用は、先ず原(漢)文を挙げ、続けてその書き下し文を添える。その際、原(漢)文の漢字は、できるだけ常用漢字に直して表記し、又、返り点・送り仮名は付けられないものとする。

(6) この点については、拙稿『呂氏春秋』中に見える中国古代医学思想に関する吉益東洞の論評について——吉益東洞『古書医言』中の、特に『呂氏春秋』の項を中心に——『研究紀要』第四六号、二二〇〜二二六頁、一九九三(平成五年)・『呂氏春秋』に見える中国古代の医学思想と吉益東洞の病理学的思惟——吉益東洞『古書医言』における『呂氏春秋』の項の第一則および第二則を中心に——『漢学研究』第三三号、二二〇〜二四四頁、一九九五(平成七年)等を参照。

(7) ただし、この箇所には山崎本の記載も残っており、いささか問題があるように見受けられる。この点については注(3)前掲拙稿を参照。

(日本大学文学部)



**A Comparison of *Kosho-Igen* (古書医言) and *Iji-Kogen* (医事古言)  
Written by YOSHIMASU, Todo (吉益東洞): Aimed at Clarifying  
the Philological Features of *Kosho-Igen*.**

Masami TATENO

YOSHIMASU, Todo was one of the greatest medical practitioners of the Koiho 古医方 school in the Edo 江戸 era. There have been many studies on his medical practices from the viewpoint of medical science.

However, there have hardly been any studies on his philosophy of medicine, particularly through his great writing *Kosho-Igen*, though it would surely have been the core of his philosophy of medicine. Furthermore, we could hardly find any studies on this great book itself, though we do have some referential materials.

This paper clarifies the philological significance of this book through a comparison with the descriptions in *Iji-Kogen*, which is an incomplete pilot version of *Kosho-Igen*.

I reached one possible conclusion that one of the core motives of Todo's writing *Kosho-Igen* was to give much more precise delineation of the medical description in *Ryoshi-Shunjyu* 吕氏春秋 as the origin of his theory of Mambyoichidokusetsu 万病一毒説.